

## 学校適応感を促進させるピア・サポートプログラムの実践的研究 —小学5年生の個人プランニングによる主体性の向上を目指して—

Peer Support Program Promoting School Adaptability among 5th graders  
— Improvement of Positive Attitude by individualized Planning at Elementary school —

松 永 千 景

Chikage MATSUNAGA

(福岡教育大学大学院

教育学研究科教職実践専攻

生徒指導教育相談リーダーコース

／福岡市立照葉小学校)

西 山 久 子

Hisako NISHIYAMA

(福岡教育大学教職実践講座)

(平成29年10月2日受理)

### 要 約

本研究では、主体性の向上を目指し、一人ひとりが計画した個人プランニングの実践を含めたピア・サポートプログラムの小学5年生への実践において、第一筆者が、学校や学級担任に行った支援経過と、学校適応感の促進に与える影響を検討した。一連のピア・サポートプログラムを小学5年生2学級に試行的に実施し、効果を検討した結果、学校適応感の有意な上昇が見られなかったものの、学級担任より、学級の雰囲気良くなった、各自の計画したサポート以外の「サポティブな行動」が学級全体やサポート活動を行えていなかった児童にも広がってきたことなど、児童の変化から様々な有効性を感じていることが報告された。

キーワード：ピア・サポートプログラム、個人プランニング、主体性、学校適応感

### 1. 問題と目的

核家族化や少子化が進展する中、子どもが兄弟姉妹、友人同士で遊び、切磋琢磨することや祖父母等と触れ合うといった機会が減少している。更には、地域社会でも、人間関係の希薄化が進む中、子どもの心の成長の糧となる生活体験や自然体験の機会が減少している。また、子ども達の人間関係を構築する力や社会性の低下といった問題も指摘されている(文部科学省, 2010)。実際に教育現場を見ても、「自分のよさ」など自尊感情にかかる小学生の肯定的な認知の少なさを課題に挙げている自治体は少なくない(例えば福岡市教育委員会, 2014)。そのため、学校・家庭・地域・企業等が一体となり、教育のなかで、意識的に子どもたちの自尊感情を育むことがさらに必要があると考えられる。実際の学校においても、落ち着いている学校では、穏やかで掃除や挨拶にも比較的よく取り組むことができる子どもは少なくない。言われたことはある程度できている一方で、自尊感情が低く、自分で考えて主体的に行動することができない子どもは多く、社会の中でたくましく生きていくための関わり合いの学びが求められている。

以上のことから、人間関係づくりの未熟な子どもた

ちに、学校生活を通して意図的に人とのかわりを持たせ自尊感情を向上させ、自分で考えて主体的に行動することができる子どもの育成を目指していくことが重要である。

意図的に実践が行われている心理教育プログラムは、構成的グループ・エンカウンター(國分, 1992)や、SEL-8Sプログラム(小泉, 2011)をはじめとするソーシャルスキルトレーニング(小林・相川, 1999)に基づいたプログラムなど、学級単位で取り組めるものだけでも様々ある。これらは、クラスが落ち着かないなどの様子が見られた折に問題状況の改善に向けて取り入れるだけでなく、包括的に実践を行い、問題状況に陥らないよう予防的にも活用されている。そうした心理社会的実践の中で、ピア・サポートプログラム(以下ピア・サポートをPSと記述)は、傾聴・自己理解・他者理解・対立解消などを含む対人関係力の向上に特化した包括的なトレーニングを行い、学んだスキル・態度を活かしてサポート活動を行うものである(滝, 2001; 中野・日野・森川, 2002)。PSプログラムとは子ども達が人間関係づくりの方法を学び、それを自らの学級や学校での役割に生かす一連の取組である。つまり、PSプログラムはPSトレーニングと個人プラ

ンニング、サポート活動、振り返りを組み合わせた包括的な心理教育プログラムである（図1）。春日井（2009）も人間関係を結ぶ力の弱さと自己肯定感の乏しさをあげ、お互いに成長しつながりを回復していく取組として、予防開発的な生徒指導の手立ての1つであるPSプログラムの有効性を述べている。

学校教育の中で、主体性とは、子どもたちが自らの言動の主体として自己決定する態度や自ら課題を選択・判断する力を意味すると定義づけられる（井上・沖・林, 2005）。PSにおける個人プランニングとは、トレーニングで得た知識やスキルを活用し、学級や仲間へのサポート活動を考え自分で計画することである。個人プランニングでは、明確な目標を設定することや目標達成の妨げとなる事柄とその根拠を明らかにし、解決策を考えること、具体的な計画を立てることの大切さが示され、自分が達成したいことであればどんなことにも応用できるとされている（コール, 2002）。ここでは、主体性の向上を、まず個人プランニングで計画したサポート活動を行うこととする。サポート活動の経験を通して一人ひとりがサポートをすることの意義を実感し、自分で気づき、考えたことを行動に移して実践するなど、さらに自分から多様なサポートを行うことで、主体性がさらに高まると考える。そこで、一人ひとりが個人プランニングしたことを元にサポート活動を実行し、振り返る過程を繰り返すことで、他者との関わりを通して、児童の自信につながり、児童の主体性を育むことができるのではないかと考えた。本実践では、個の主体性の育成を目指し、プロセスとしては、PSトレーニング→プランニング→サポート活動→スーパービジョンのプロセス（日本PS学会, 2016）を用いる。これを連続性と段階性のある一連の活動として繰り返し、すべての子どもたちがよりよい人間関係づくりを行うことができるように取り組んでいく。児童が主体性を持って周囲と関わり、よりよい学級づくりや学校づくりに貢献するためのPSプログラムを取り入れることは、生徒指導の充実に効果をもたらすものと考えられる。

次に、PSプログラムを実施する時期や内容について検討した。ニューマン＆ニューマン（1988）によると、エリクソンは心理社会的理論において、8つの心理社会的発達段階を提唱しており、10歳から11歳の時期は、学童中期にあたり、その後の人生段階で心理学的発達の過程で重要な役割を演ずる時期であると考えられている。生産性、達成、社会的技能、協調性、対人的感受性などはすべて、学童中期の重要な課題であり、その後の青年期や成人期と深く関わると述べられている。従って、協調性や対人的感受性など、学校生活の中で友達との関わり方のスキルや態度を児童に学ばせることが、その後の児童の発達段階に重要な影響を与えるのではないかと判断することができる。更に、カーウィ（2003）は国立教育政策研究所主催の国

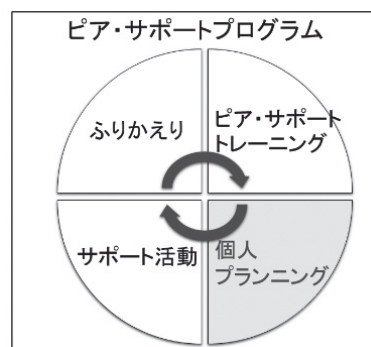


図1 ピア・サポートプログラムの定義  
（日本PS学会, 2016）を元に改編

際生徒指導フォーラムの中で、イギリスのPSが仲間支援に関わる様々な取り組みを包括したものであることやPS活動に適した開始年齢と特徴があることを説明している。

また、持丸（2016）は、PSトレーニングの活動の種類とその適正開始年齢、カーウィの説明内容をまとめている。PSトレーニングの種類は、いろいろなスキルを伸ばすために、ゲームや活動に参加し、人間関係やルールなどについて話し合う「話し合い活動」や、ピア・ヘルパーになるために聞く・主張・説得・リーダーシップなどのトレーニングに取り組む「仲間づくり」、人と関係を結ぶことに何らかの課題を抱えている個への適切な支援を学ぶためのお世話活動をする「交流活動」など様々である。そこで、小学5年生に友達と協力するために必要なことは何か体験を通して学ばせることや自分も相手も大切にしたい断り方のスキルや態度を身につけさせること、友達に対するサポートを行い友達や先生から認められることで喜びを得ることなどの内容を取り入れたPSトレーニングを通して友達と関わり、様々な感情をもつことを実感させていくことは、その後の児童の成長に大きな意味をもたらすと考ええる。

以上のことから、聞く・主張するなどのトレーニングなどの「仲間づくり」を中心とした本研究は、適正開始年齢と合致しており、この時期に実践を進めることは、非常に意義深いことであると言える。

学校教育の中で適応することはとても大切なことであるが、適応とは、個人と環境の調和、適応感とは個人と環境との主観的な関係であり、適応の一指標であるとされている（栗原, 2013）。また、学校適応感とは、学校生活に対する満足度や帰属意識などを要因とする、児童生徒の主観的な心理状態と述べられている（石田, 2009）。これによると、適応感は個人の主観によって変容するものであり、個人差があるものと捉えられる。よって、学校適応感を学校での友達とのつながりや学習、学級や学校などの学校生活における満足の度合いとし、一人ひとりに適切な環境が整えられれば、学校適応感を促進することができるものと考え

表1 実施したプログラムの構成

15分	45分
① 自他理解	① ピア・サポートとは
② よさみつけ	② 協力するために
③ 聞き方伝え方	③ 関わり合う聴き方
④ ふりかえり	④ プランニング 1 回目
⑤ プランニング 2 回目	⑤ 自他の感情理解
⑥ よさみつけ	⑥ 素敵な断り方
	⑦ ふりかえりと意欲付け

る。学校は児童にとって、家族以外の友達や教員と関わることのできる貴重な場である。学校生活を通して、友達との関わり方を学んだり友達と協力することの楽しさを感じたりすることで、将来にわたって人と交流することの楽しさを感じることができると考える。アメリカの社会学者である T. ハーシが提唱した理論にソーシャルボンド理論がある。岡山県教育センター(2013, 2014)によると、学校に行くべきという義務感や友達と一緒にいると楽しいと感じる魅力は、子どもと学校を結びつけるボンドの役割を果たしていると考えられ、ソーシャルボンドの構築が学校適応感を高めることにつながるとしている。更に、将来にわたって、子ども自身が人と交流しソーシャルボンドを築くために、学校としてどんな力を育みたいか、明確にすることの必要性も述べている。そこで、学校教育の中で、友達との関わりをもち、学んだことを生かしてサポート活動を行う PS プログラムを意図的・計画的に実践することによって、児童は友達と一緒にいる楽しさ、友達へのサポートを行うことの喜びなど、学校にいることの魅力を感じ、友達とのつながりに満足感を味わうことができるのではないかと考えた。

以上のことより、児童の主体性の向上を目指し、一人ひとりが計画した個人プランニングの実践を取り入れた PS プログラムを小学5年生に実践し、学校適応感の促進に与える影響を検討することとした。

## 2. 研究

### (1) 目的

児童の主体性の向上を目指し、一人ひとりが計画した個人プランニングの実践を取り入れた PS プログラムを小学5年生、2 学級に実践し、学校適応感の促進に与える影響を検討した。さらに、PS プログラムを実践するにあたり、第一筆者が学校や学級担任に行った支援経過をまとめた。

### (2) 方法

**対象：**A 県内の公立小学校の5 年生5 学級の児童を対象とした。その中の2 学級を実践群、残りの3 学級は協力群とした。

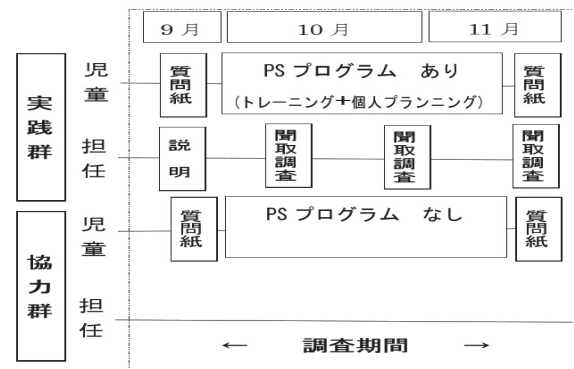


図2 研究デザイン

**実施時期：**201X 年10 月～11 月に実践を行った。検証に用いる事前調査を9 月後半に行い、事後調査を11 月後半に実施した(図2)。

### PS 活動の推進

#### ① PS 授業 (PS トレーニング) の実践

PS 授業を導入するにあたり、まず、第一筆者が主、学級担任は授業補助となり授業実践を行った。PS 授業の流れは、めあてにつなぐための雰囲気作りの「ウォーミングアップ」、体験時間を多く取り自己の気付きを引き出すことがポイントの「主活動」、日常活動にいかそうと意欲につなぐ「振り返り」から構成されている。それらの意図を踏まえた第一筆者の授業の進め方や児童の様相観察を通して、学級担任がPS 授業の具体的な内容理解やよさの実感を促すことが出来るように努めた。更に学級担任には、ふりかえりの場面で、日頃の活動とつないで児童の言動に対する価値づけを行ってもらった。

#### ② サポート活動の実践

個人プランニング後に、第一筆者が個人プランニングシートに価値づけのコメントを記入した。サポート週間では、学級担任には直接、朝の会や帰りの会等で友達に対するよい関わりを認め、褒める声かけや価値付けを意識して行ってもらうようにした。また、個人プランニングシートに毎日、児童の頑張りの評価やアドバイス記入を提案した。

#### ③ PS 資料の準備と整備

第一筆者が学習指導案や学習プリント、掲示物や活用教具などの PS 資料の作成を行った。学級で他者との関わる際に必要なスキルのポスターや児童一人ひとりの授業の感想を教室に掲示できる個人ポケットを作成し、教室に掲示した。

#### ④ 校内での広報活動

実践後は、PS プログラム実施への理解と協力を得るために、実践した研究を元に内容や効果に対する共通理解を図るための校内研修を行った。PS プログラムのねらいや構造などの理論学習に加え、取組の紹介、PS トレーニング体験を行い、PS プログラムの全体像がつかめるようにした。希望者への資料配布を行い、



のピアサポーターをめざして 5年 組 ほん ( )

☆クラスのみんなが気持ちよくなるためにあなた自身ができそうなことは何でしょう。  
あなたのサポートプランを1つたてよう。(10月28日(金)から11月10日(木)までがんばってみよう。)

わたし・ほかのサポートプラン(いつ・どこで・だれに・何をやる)

なぜこのプランを立てたかという(理由)

図3 個人プランニングシートの一部

PSに直接関わりがなかった他学年教員にも理解してもらえよう努めた。今後、全職員が取組を周知できるようPS通信の発行を目指している。

### PS活動の具体

#### ①カリキュラム(実施プログラム)作成

プログラムの内容として自他理解、聞き方伝え方、人間関係作り、個人プランニング、振り返りなどを取り入れ学校適応感の向上をめざしていく。学習上の位置づけに関しては、今回新たに総合的な学習の時間の内容として学校行事や特別活動とも関連させながら実施できるようにした。

#### ②基本的な進め方(時間設定)

朝の活動時間である15分のプログラム(6回)と45分のプログラム(7回)が関連するように内容と時期を考え実践した。その際、友達のよさみつけを定期的に取り入れ、手紙をもらった感想を伝えあうなどの交流を行い、友達同士のよりよい関係づくりに生かすことができるようにした。

#### ③個人プランニングシートの工夫

学級の友達へのサポート活動がイメージしやすいように、サポートプランやよさ、難しさ、目指す姿などの具体的な項目を書き込むことができる個人プランニングシートを作成した(図3)。また、毎回のサポート活動を振り返る欄やサポート週間が終わった際に感想を記入する欄を設け、児童がサポート活動を自己評価することで、自己のふりかえりや意欲の継続を図った。

#### ④PS通信の発行

児童や学級担任のモチベーションを上げたり保護者の理解促進につなげたりすることを目指し、定期的に保護者向けのPS通信を発行した(図4)。通信で授業場面や学級担任の価値付けのよさ、児童の感想や気づき、児童の変容した具体的な姿、サポート活動に取り組む様子やサポート活動後の気持ちの変容などを紹介した。

#### ⑤PS週間の活用

個人プランニングに合わせて2回のPS週間を設定した。期間中は特に学級担任が朝の会や帰りの会等で友達に対するよい関わりを認め、褒める声かけや価値付け、アドバイスを意識して行うようにした。教科以

ピアサポート(仲間を支える活動)の学習が始まりました

「 のピアサポーターを目指して」と題して、5年生の学級でこれから、ピアサポートの学習を一緒に行っていくことになりました松永千景です。どうぞ宜しくお願いいたします。

ピアサポートの学習を通して、自分や友達のことを考えること、伝え方・聴き方、協力する為に必要なことなど、たくさんのかかわりの中で人との接し方を学んでいきます。相手の気持ちを考えながらクラスや仲間のためになるサポートを行うことでより絆を深め、よりよい人間関係作りにつなげていくことができればと思っています。

来年6年生になり学校を引っ張っていく立場になる5年生、6年生になると下級生のお手本となりサポートをする立場になります。まずは身近にいる友達やクラスのために自分ができることを考え、サポートしていくことを目指します。自分の良さを生かしたサポート活動を行い、クラスや友達の仲を今よりも深めることができればと思っています。

図4 PS通信の一部

外の学習時間(朝の会・帰りの会など)を有効に使うことで児童の意識が連続され、活動内容・価値観の強化、般化をめざした。

### ⑥環境整備

学級で他者との関わる際に必要なスキルをポスターとして教室に掲示することで、児童が学んだスキルや態度を日常的に意識したり、困った時に学級担任が活用したりできるようにした。児童一人ひとりの授業の感想を教室に掲示し、日常的にお互いで見合うことができる場を設定した。教師のコメントを載せ、児童の気づきを褒めていった。そうすることで、児童自身が友達のよさや頑張りに気付いたり他の友達との関わり方を学んだりすることができるようにした。

### 効果測定

#### ①学校環境適応感尺度

栗原ら(2013)の「学校環境適応感尺度(ASSESS: Adaptation Scale for School Environments Six Spheres, 以後ASSESSと表記)」を用い、生活満足感、教師サポート、友人サポート、非侵害の関係、向社会的スキル、学習的適応の6因子について測定した。各因子は5件法で評定を求め、標準化した適応度を算出する。適応度が高い点数ほど適応的であることを示す。

#### ②児童による授業アンケート

第一筆者が作成した児童による授業評価を4件法で行うと共に、授業の振り返りの記述を分析した。

#### ③学級担任への聞き取り調査

学級でのPSプログラムの実践が児童一人ひとりの学校適応感を高めることができたか検討するために、半構造化面接による学級担任への聞き取り調査を行った。

### (3) 結果と考察

#### ①学校環境適応感尺度(ASSESS)

ASSESSの6因子について、実践群・協力群間と時期による2要因の分散分析を行った。なお、欠損値がある児童のデータは分析対象から除外した。その結果実践群・協力群間の交互作用においては、有意差が示されなかった。その理由として、期間が1ヶ月半と短期間であり、①授業頻度が週2回程度と定着に十分でなかったこと、②PSトレーニングを学級担任でない

表2 小学5年生の実践群協力群の学校適応感下位尺度の分散分析結果

	実践群 M (SD)		協力群 M (SD)		分散分析		
	事前	事後	事前	事後	主効果 (群)	主効果 (時間)	交互作用
生活満足感	55.14	10.41	55.94	12.66	54.84	11.93	54.38 14.03 .34 .26 .35
教師サポート	61.62	13.85	63.79	14.96	56.50	12.91	57.24 13.82 11.21 ** 1.47 .35
友人サポート	55.46	13.51	60.13	15.74	56.51	12.68	57.70 15.82 .16 4.26 * 1.50
向社会的スキル	56.24	10.61	60.54	12.68	54.14	11.46	56.59 11.28 4.85 * 9.15 ** .69
非侵害的関係	61.99	15.15	61.21	15.90	57.51	15.00	55.43 14.89 7.07 ** 1.16 .24
学習的適応	55.21	14.14	56.39	14.80	52.49	11.77	53.42 14.25 2.67 .84 .01

\*p<.05, \*\*p<.01

表3 授業アンケート結果 (4件法の回答の平均)

① 今日の学習は楽しかったですか。	3.9
② 今日の学習を頑張りましたか。 (話す 聞く 考える)	3.8
③ 学習の内容を理解することができましたか。	3.8
④ 今日の学習をふだんの生活にもいかしていきたいと思いますか。	3.8

第一筆者が担当したため、学習の日常化が困難であったことなどが挙げられる。しかし、教師サポート、被侵害的関係に関しては、1%水準で有意な差が見られた。実践群の学級については、教師の支援がある、認められているなど教師との関係が良好であると児童が以前より感じており、教師からのサポートが子ども達に伝わったことを明らかにしている。同時に、被侵害的関係においても、1%水準で有意な差が見られた。拒否的・否定的な友達関係がないと感じている程度が向上した、つまり児童同士の関係が、以前より安心できる関係になったということを示している (表2)。

#### ②児童による授業アンケート (表3)

授業評価において、当初は、学習の楽しさや次回への期待が中心であった。回を重ねるごとに学習内容で自身が重要だと感じたことや体験活動での対人関係に対する気付き、友達への賞賛やサポート活動への意欲が多く記入されるようになった。

#### ③学級担任への聞き取り調査

PSプログラム終了後の半構造化面接の結果から、学級担任より、進んで学級や友達の為に各自の計画したサポート以外の「サポーター的な行動」が学級全体やサポート活動を今まで行えていなかった児童にも広がってきたこと、周囲を見る目が育ってきたこと、手助けが必要な児童への関わり方や声のかけ方が分かるようになってきたこと、学級の雰囲気が向上したことなど、児童の変化から様々な有効性を感じていることが報告された (表4)。

本研究では ASSESS の6因子について、実践群・協力群間の交互作用においては、有意差が示されなかったものの、PSプログラム終了後の学級担任による半構造化面接の結果から、児童の様々な変化から有効性を感じているという結果が示された。以下に総合考察としてまとめる。

#### 4. 総合考察

本研究では、主体性の向上を目指し、一人ひとりが計画した個人プランニングを取り入れた PS プログラムを小学5年生、2学級に実践し、学校適応感の促進に与える影響を検討した。以下、学んだスキルの日常化と個別計画の必要性、児童の動機付けを高める為の教師のかかわりに関しての考察を行う。

一連の PS プログラムを試行的に実施し、その効果を検討した。学校適応感の有意な上昇が見られなかった一番の要因として学級担任でない者が PS トレーニングを担当したため、学んだスキルの日常化が困難であったことが考えられる。青木 (2011) は、習慣は繰り返せば繰り返すほど定着化すると述べている。学級担任が繰り返し学んだスキルや態度を話題に出す、日頃の学習時間内にサポート場面を取り入れるなど、学んだスキルや態度を繰り返す場面を取り入れ、定着化を目指すことが大切である。今後、朝の活動時間15分のプログラムと45分のプログラムの関連性や教科以外の学習時間 (朝の会・帰りの会など) の使い方、環境整備など、今まで行った手立ての内容、方法を再検討する必要がある。さらに、学年で一斉に PS 週間を実施するなど、更なる般化のための手立ての構築を行っていく。

米国では、児童生徒が国を担う大人になるよう早期には大人の支えによって全体的なプランニングが行われ、後には、児童自身の内面化された力として自身の長期的な視点での個別計画を立て、遂行する力を身に付けられるようになることが目指されている。また、学校教育において、児童生徒が年齢を重ねるにつれ、個別の計画を立案・推進できるような取り組みがなされ、個別の計画の必要性が述べられている (西山, 2014)。本研究では個人プランニングを取り入れた PS プログラムを実践した。サポート週間で、個人プランニング、サポート活動、振り返りを繰り返す中で、児



表 4 PS プログラム実施後の実践群学級担任の面接結果

	5のA	5のB
① 児童の対人関係作りを推進する上で学びがあるものだったと思いますか。	一見男女の仲がよさそうに見えたが活動を通してそうでないと分かった。聴き方がとてもよくなった。	友達のよさ見つけや心地よい聴き方など改めて振り返ることで対人関係が高まった。
② 計画以外のサポートが学級で広がっている実感はありましたか。	一人のサポートを手助けしたり自分から学級の為のサポートをしたりする姿が見られた。友達同士で声をかけ合い頑張りあう姿が見られた。	自ら進んでクラスの為になることを見つけている姿が見られた。(ゴミ拾い・明日のお知らせで伝えるなど)
③ 学級の雰囲気向上に効果があるものだったと思いますか。	学級の雰囲気が温かくなった。活動をきっかけに自然なサポートが上手くなった。	高学年のこの時期に行うことで無関心や恥ずかしいなどの思いを断ち切れたと思った。
④ 子ども達の承認感を高めるのに効果があったと思いますか。	よさ見つけで書いた手紙をもらった子ども達はとても嬉しそうだった。手紙をもらった感想を書かせ、広めることで、次への意欲につながった。	よさ見つけを行い、手紙をもらった子どもの表情やつぶやきから喜びや満足感を感じることができた。
⑤ 子ども達の友人サポートを高めるのに効果があったと思いますか。	今までより更に仲が深まった。日頃話していない人があることに気付いていなかったが、日頃話さない友達からよさの手紙をもらうことで、関わると嬉しいということに気付いていた。	サポート計画に「困っている友達に声をかける」といった友人を意識したものがあった。反省より達成感も確認できた。
⑥ 子ども達の向社会的スキルを高めるのに効果があったと思いますか。	一人ひとりに差はあっても無理のないプランを確実に行い、評価できた。よさ見つけは新しい友達関係を広げる良い機会になった。	効果はあったと思うが、十分ではない。意識の継続や時間確保の難しさを感じた。
⑥ 系統的な対人関係作りの学習は現在の教育指導計画に必要だと思いますか。	一年間を通して行った方が良い。意識の継続が必要。	対人関係スキルが不足しているから必要。
⑦ 児童への関わる場面で断続的に意識したことはありますか。	サポート期間中は特に意識して子ども達を褒めた。教師の継続が大切だと感じた。	朝の会や帰りの会などでピア・サポートに関する指導を入れた。
⑧ 児童の様子で何か変化したことはありますか。	手助けが必要な子への関わり方や声のかけ方が分かるようになった。サポートをしている人に気付き、手伝うようになった。受ける側がサポートする側が変わっていった。	周囲を見る目が育ってきた。気遣いができるようになった。
⑨ よかった点。	学級経営がしやすくなった。すればするほど伸びる子は伸びる。サポートする子がほとんどになった。	男女仲や協力など、学級の雰囲気が良くなった。
⑩ 課題や改善点。	サポートばかりされる子に対する手立てが必要。サポート計画に時間がかかる。分かりにくい計画だと評価がしにくい。	時間不足など、継続の難しさ。

児童はより自分に合った計画を立てることができるようになっていった。回数を重ねるうちに、実践意欲が増し、学習内容で自分自身が大切だと感じたことやサポート活動を通しての対人関係に対する気付き、友達への賞賛を記入したものが多くなった。本研究においても、PSプログラムにおいて個人プランニングを行うことによって、より自分に合った計画を立てることができるようになったり、自分のサポート計画・実践を通して対人関係に関する気付きが生まれたりした。そのような児童の変化から、将来を見据えた長期的な視点で自分に合った計画を立てることの大切さの実感や、自分が立てた計画を実行することができる力につながっているのではないかと考える。

江角・庄司(2016)は一連のPSトレーニング及び実践経験でPSを行った者が自身のサポート活動を通して動機付けを高める結果になったことを報告している。本研究においても、児童の振り返りの発言や感想から、友達の為にサポート活動を行っていたが、反対に自分自身が嬉しくなり自分に得るものがあったという内容が多く見られた。つまり児童はサポート活動をした際に感謝される心地よさを感じ、人の役に立てた喜びから、サポート活動を前向きに頑張ろうと思う意欲や意志を実感しており、動機付けが高まったと考えられる。また学級担任より、友達の良い取組を見て、日常生活で行えるサポートが多様であることに気付き、各自の計画したサポート以外の「サポーター的な

行動」が、学級全体やサポート活動を行えていなかった児童にも広がり、今までサポートを行えなかった児童も、自分にもできそうだと実感し挑戦する姿が見られたなど、児童の変化から様々な有効性を感じていることが報告された。計画以外のサポートに進んで取り組む姿は主体性の向上に対する一定の効果を示すものと言える。さらに、第一報告者の観察や半構造化面接を通して、成果を実感している担任は、サポート活動に地道に取り組んでいる児童を全体の前で具体的に取上げて価値付けたり、友達がサポート活動を頑張る姿を見て手助けしている児童を全体で紹介して認めたりなど、児童の言動に対する価値付けや賞賛を日常的に努めて行っていることが分かった。児童の動機付けを高めるための教師の児童に対する日常的な価値付けや賞賛は児童の動機付けを高める結果となっていることを踏まえ、今後の計画的・継続的な取り組みに活かしていきたい。

これまでピア・サポート研究において個人プランニングに着目した研究はあまり行われてこなかった。そのため、本研究から得られた知見は一実践の成果に過ぎない。また、実施期間が短く対象も1校1学年に限られているため、本取組自体の成果を汎化するには至らない。今後は対象者・学年を広げ、学びの系統性を考えた長期的な取り組みにしていく必要がある。PSプログラムのねらいや構造などの理論を学ぶ校内研修を実施し、年間カリキュラムを作成し、授業の指導案やワークシート、提示資料などの整備を行い、計画的・継続的な取り組みを実施し、効果性を検討する必要がある。

## 謝 辞

本研究をまとめるにあたり、学びの機会を提供していただいた教育委員会及び関連機関の方々、現場で実践させていただいた校長先生をはじめ、関係の先生方に多大なるご協力をいただきました。深く感謝申し上げます。

## 引用・参考文献

- 青木多寿子 2011 もう一つの教育—良い行為の習慣をつくる品格教育の提案— ナカニシヤ出版
- コール・トレバー 2002 ピア・サポート実践マニュアル 川島書店
- 江角周子・庄司一子 2016 中学校でのピア・サポート実践におけるサポーターへの効果 共生教育学研究, 5, 15-26
- 藤亀美紀 2011 PSPにおけるプランニング, スーパーバージョン・フォローアップに視点をあてた効果研究 ピア・サポート研究, 8, 18-27
- 福岡市教育委員会 2014 新しい福岡の教育計画後期実施計画
- 井上史子・沖裕貴・林徳治 2005 中学校における自

- 主性尺度項目の開発 教育情報研究, 21, 13-20
- 石田靖彦 2009 学校適応感尺度の作成と信頼性, 妥当性の検討 愛知教育大学実践総合センター紀要, 12, 287-292
- 春日井敏之 2009 ピア・サポート 子どもとつくる活力ある学校 ぎょうせい
- カーウィ 2003 イギリスの事例 (ピア・サポート) 生徒指導国際フォーラム1999~2001報告書集(国立教育製作所で主催) 58-66
- 小林正幸・相川充 1999 ソーシャルスキル教育で子どもが変わる小学校—楽しく身につく学級生活の基礎・基本 図書文化
- 小泉令三 2011 子どもの人間関係能力を育てる SEL-8S ①社会性と情動の学習 (SEL-8S) の導入と実践 ミネルヴァ書房
- 國分康孝 1992 構成的グループ・エンカウンター 誠信書房
- 栗原慎二・井上弥 2013 アセスの使い方・活かし方 ほんの森出版
- 黒水温・高松勝也 2015 豊かな社会力を育てる対人スキルアップ学習の効果の検証 福岡教育大学大学院教職実践専攻年報, 5, 31-38
- 持丸修一郎 2016 学校適応を促進させる生徒指導の研究—高学年でのサポート活動の充実を図る低・中学年からのプログラムづくりを通して— 福岡教育大学教職大学院研究報告 (未公開) 171-176
- 文部科学省 2010 生徒指導提要
- 中野武房・日野宜千・森川澄男編者 2002 学校でのピア・サポートのすべて ほんの森出版
- 日本ピア・サポート学会 2016 トレーナー養成標準プログラムテキストブック Version3
- 西山久子 2014 Comprehensive School Counseling Program における Framework の検討 I~ミズーリ州におけるガイダンス・カリキュラムの構築をとりあげて~ 福岡教育大学大学院教職実践専攻年報, 4, 201-208
- ニューマン, B.M. & ニューマン, P.R 1988 新版生涯発達心理学 エリクソンによる人間の一生とその可能性 川島書店
- 岡山県総合教育センター 2013 不登校を減らすために有効な支援に関する調査研究—総社市の取り組みから見えてきたもの— 岡山県総合教育センター研究紀要, 7, 1-13
- 岡山県総合教育センター 2014 「教師がつながる! 子どもがつながる!!—新たな不登校を生まないために—」リーフレット
- 滝 充 2001 改訂新版ピア・サポートではじめる学校づくり 実践導入編 金子書房
- 滝 充 2009 改訂新版ピア・サポートではじめる学校づくり 小学校編 金子書房